

特集「近代京都と文化」にあたって

高 木 博 志*

本特集号は、班長高木博志が、2017年4月より2022年3月まで5年間、主催した「近代京都と文化」班の共同研究報告書である。後掲、研究班一覧にあるように42回の研究会を開催し、そのなかで京都市内・宇治・彦根などのフィールドワークも行った。2020年春より世界をおおったパンデミックのコロナ禍により、途中、研究会を中断したり、Zoomでの開催も余儀なくされた。そうした経験を経ながらも、本特集号は、2023年度に刊行される『近代京都と文化』（思文閣出版）とともに、35人のメンバーからなる共同研究報告書として、極めて内容の濃いものになったと自負している。とりわけ『人文学報』は、400字で100枚前後の大論考の執筆が可能なため、大作も寄せられた。

研究班員は、以下の通りである。長志珠絵、北野裕子、丸山宏、玉城玲子、高久嶺之介、山本真紗子、平山昇、加藤政洋、市川秀之、清水重敦、並木誠士、植田彩芳子、大矢敦子、中野慎之、原田敬一、本康宏史、中川理、池田さなえ、富田美香、森光彦、土田真紀、柏木知子、青江智洋、松川綾子、齊藤紅葉、ジョン・グリーン、細川光洋、イリナ・ホルカ、鈴木則子、國賀由美子、田中智子、谷川穰、木下千花、藤原学、高木博志、岩城卓二、高階絵里加、永田知之、福家崇洋（敬称略・順不同）。

「近代京都と文化」研究班は、今までに私がかかわった研究班と同様に、「京都の文化」を相対化する視点や、文化がもつ政治性にこだわった。それは人文科学研究所の渡部徹・井上清諸氏の社会運動史研究の伝統や、林屋辰三郎編『文明開化の研究』（岩波書店、1979年）から飛鳥井雅道編『国民文化の形成』（筑摩書房、1984年）へと引き継がれた文化史研究の系譜を意識するがゆえである。

「近代京都と文化」（2017～2021年度）研究班の趣旨をかかげたい。

本研究では、近代の京都と文化を対象としつつ相対化する。今日、京都は、年間5500

*たかぎ ひろし 京都大学

万人以上が訪れる世界でもっとも人気のある観光都市である。「日本文化を創り出してきた京都」,「おもてなしの文化」, 雅な貴族文化などとバラ色に表象され, 文化庁移転のうたい文句にもなる。こうした京都イメージは, 近現代を通じて, 政治的, 社会的に創り出された側面が強い。それに対して近代京都の文化について, 民衆の生活・花街の性・差別の問題といった周縁性や, 文化をめぐる政治や地域社会とのかかわりなどを含み込んだものとして捉えなおしてゆきたい。そのために, 政治・教育・社会運動・経済・社会・宗教・思想や美術・映画・文学・建築・造園など多様な歴史学の分野を専攻する研究者が, 自分の専門領域から一歩踏み出して, 近代京都の「文化」を広くとらえ直して考えてゆきたい。今まで行った, 「近代京都研究」(2003～05年)「近代古都研究」(2006～10年)「近代天皇制と社会」(2011～16年)の共同研究を踏まえ, 地域をめぐる学際的で批判的な共同研究会を展開したい。

特集号の論考を紹介する。

青江智洋「江馬務の〈歴史の可視像化〉論—京都画壇と風俗研究会の萃点を論点として」は, 初めての体系的な江馬務論である。2012年春季企画展「風俗史家 江馬務の見た明治・大正・昭和」(花園大学歴史博物館)にかかわった青江は, 10年の時間をかけて一次史料を博搜し本稿を著した。本来, 実証主義の江馬の仕事は, 絵画専門学校に就職し教育する中でビジュアル性重視へと変化し, そこで「歴史の可視像化」に至る。そして有職故実・生活風俗, 京都の祭礼の考案, 映画の時代考証など広範な活動となってゆく。

並木誠士「浅井忠の美術教科書—洋画指導からデザイン指導へ」は, 浅井忠の生涯と「美術」教科書の系譜を概観する基礎研究である。1902年に吉田に開校した京都高等工芸学校は, 東京高等工芸学校の「普通工業」の図案とも違う, 京都の伝統産業に根ざした「美術工芸」の実業教育がめざされた(『学理と応用—京都高等工芸学校初10年の軌跡』京都工芸繊維大学美術工芸資料館, 2022年)。大正期には, 京都帝国大学文科大学, 京都市絵画専門学校をともに有する吉田地域は, 鴨川左岸カルチュラタンともいえよう。工芸制作現場に近い京都だからこそその「応用」力の要請を背景として, 中等教育用教科書において, 対象を正確に把握し図案化する方法論が生まれ, さらに理論化が図られた。

土田眞紀「『工芸』の岐路—高村豊周・今和次郎・柳宗悦」では, 1923年の関東大震災後, 京都に移住した柳宗悦が, 今和次郎の「観る者」, 高村豊周の「作る者」という時代思潮を, 「使う者」との一体性により「工芸」の三要素として, 有機的につないだ。それが社寺に囲まれ東寺の骨董市も開かれる古都でありながら, 急速な近代化が進む京都においてこそ可能であった。なぜなら西陣織や京焼などの京都の伝統工芸とは接点をもとうとしなかった柳の営みは, ウィーン分離派 Wiener Secession のように, 伝統からの「分離」=切断が近代デザイ

ン運動にとって必要条件であったことを、本論は示唆する。

ここ10年余のツーリズム研究の新しさは、大衆社会状況から戦時下に至る古都奈良・京都のツーリズムを単なるナショナリズムではなく娯楽・消費とのかかわりで考えることにある（たとえばケネス・ルーフ『紀元二千六百年—消費と観光のナショナリズム』朝日新聞出版、2010年、平山昇『初詣の社会史—鉄道が生んだ娯楽とナショナリズム』東京大学出版会、2015年など）。そして史料素材を工夫し、社会や人々の受容の問題に迫ろうとする動向である。菅沼明正「文化財制度と近代ツーリズム—戦前期における京都と奈良の観光と文化財鑑賞」は、それらの課題を京都・奈良において検証する。従来いわれてきたように、観光による文化財観賞という戦後につながるツーリズム様式や古都への大衆の歴史意識涵養といった実態は、戦前期には見受けられない。小学生や一般大衆においては、鉄道会社に誘導された、聖地や名所、娯楽施設の訪問にすぎないと論じる。

藤原学は、京都と谷崎潤一郎とのかかわりを、「朱雀日記」（1912年）の平安京イメージ形成と、それが谷崎の江戸文化への喪失感との合わせ鏡であることを論じてきた（「昔の東京」という京都イメージ—谷崎潤一郎の京都へのまなざし」丸山宏・伊従勉・高木博志編『近代京都研究』思文閣出版、2008年）。藤原学「『朱雀日記』と『京都名勝記』—明治45年谷崎潤一郎の京都ガイドブック」では、京都参事会編『京都名勝記』（五車楼書店、1903年）が「朱雀日記」執筆に直接に参照されたことを、原稿や古典作品との異同をも緻密に考証する中で結論づけた。そしてここで創り出された平安京イメージは、後年の谷崎作品にも引き継がれることになる。

齊藤紅葉「明治初期の京都における公家地・所有物の変容—岩倉具視、杉孫七郎、榎村正直を中心に」。1883年岩倉具視による京都への体系的な伝統復古策では、宮内省京都支庁の設置が、大きな画期となる。しかしそれ以前の京都における未解明な部分が多いが、とりわけ長州藩の榎村正直に焦点をあてると、新しい史実が提示される。たとえば1877年以前から準備された「大内保存」事業、霊山招魂社への下金、華族の救済、その後の旧公家邸宅地の買上、整備、そして近衛家古美術品の献上などと、榎村をはじめとする長州人脈と京都府・宮内省の営みが明らかにされる。

玉城玲子「1930年代後半の和紙漉場調査と寿岳文章」。寿岳文章・静子『紙漉村旅日記』（向日庵本、1943年）は、日本の私家版の最高峰であり、地方色豊かな和紙の「実物貼附」が試みられた。東北から九州に及ぶ、1937～40年の寿岳による「手漉紙業の歴史地理的研究」の眼目は、「現地の実地調査」にあった。伝統的な手漉き和紙生産は、機械で大量生産される洋紙に押され衰退期にあり、かつ戦時下の工業的統制の影響を受けつつあった。本論文では、造本・装幀の評価が高い同書の内容を、調査に伴い残された紙業調査資料を交えて検討し、昭和戦前期の和紙調査の実態を捉え直す。

ついで資料紹介を3本掲載する。

従来、1920年に3人の老婦人のキリシタン信仰と上野マリア墓・ザビエル画像などキリシタン遺物の「発見」により、京都帝国大学のキリシタン美術・文学研究、南蛮ブームが到来したというのが通説であった（高木博志「1920年、茨木キリシタン遺物の発見」松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィー』山川出版社、2015年）。しかしマルタン・ノゲラ・ラモス（書簡の邦訳坂口周輔）〈資料紹介〉「茨木・千提寺の隠れキリシタン初発見—1880年のマラン・プレシ神父の書簡（翻刻・邦訳・解題）」では、パリ外国宣教会の資料館の日本からパリに送った1880年の宣教師マラン・プレシの書簡を紹介し、北摂・千提寺の40代の女性が、デウスの宗教は「人間のどんな愛情にもふさわしい」と語り、高山における「キリスト教徒の子孫」の存在を伝える。この画期的な資料紹介により、京阪神における近代のキリシタン発見史は、書き換えられる。

高木博志〈資料紹介〉「民芸同人・寿岳文章宛水谷良一書簡（向日庵資料）」は、民芸同人で官僚である水谷良一から英文学者・寿岳文章に宛てた書簡群（向日庵資料、日中戦争から敗戦まで）を翻刻したものである。書簡からは、1938年に『工藝』の編集から水谷が手を引いたのは柳宗悦・芹沢銈介など上の世代との「民芸」観の違いが原因であったことや、寿岳の『紙漉村旅日記』（向日庵本、1943年）の調査に府県の官僚ネットワークを紹介したこと、敗戦直後の知識人の価値観の葛藤などを伝える。民芸研究の一助となろう。

齊藤紅葉・桑原優子・林潔・西脇彩央〈資料紹介〉「幕末明治巷談絵噺—幕末・維新时期京阪地域の一「風景」」。『幕末明治巷談絵噺』（1862～69年）は、人文科学研究所日本部において明治維新や天皇研究を行った坂田吉雄が人文研に寄贈したものである。解題においては、かつて坂田が勤めた大阪府立中之島図書館所蔵の風聞書なども博く比較検討する。長州びいきでありながらも、天皇の新政に落胆する大阪の作者が、彩色鮮やかな挿絵と一体となり、虚実あいまった物語を描いたものとする。京阪神の重要な風聞書として活用されることになるであろう。なお本特集号の編集に安国陽子氏の協力を得た。

最後に共同研究班「近代京都と文化」（2017～21年度）の開催一覧をかかげたい。

研究会開催一覧〔 〕は報告者。通常は基本的に京都大学人文科学研究所において開催した。

2017年4月1日 富岡鉄斎が顕彰する国史〔高木博志〕

広沢池・沢乃家・佐野藤右衛門邸花見

5月20日 溝口健二と近代京都花街・遊郭の表象〔木下千花〕

7月15日 裏寺町の空間文化誌〔加藤政洋〕

9月24日 『向日市歴史的風致維持向上計画（歴まち計画）』を歩く〔玉城玲子、高木博志〕

10月28日 染織祭創設（昭和6年）にみる昭和初期の京都—染織業界と京都市の動向を中心に〔北野裕子〕

特集「近代京都と文化」にあたって（高木）

- 11月18日 大正・昭和期における「桃山御陵」参拝の動向〔平山昇〕
「松江国際文化観光都市建設法」成立と小泉八雲〔工藤泰子〕
- 12月10日 「戊辰之役之図」と明治維新観〔高木博志〕
太田喜二郎の画業と生涯〔植田彩芳子〕（忘年会・鶴清）
- 2018年1月20日 「細雪」余香—谷崎潤一郎作詞京舞井上流「花の段」をめぐる〔藤原学〕
吉井勇と近代京都〔細川光洋〕
- 4月7日 武徳殿の建設と国風イメージの波及〔中川理〕
広沢池・沢乃家・佐野藤右衛門邸花見
- 6月16日 「教育的都会」京都の誕生—高等工芸学校・高等師範学校設置問題を中心に〔田中智子〕
- 7月7日 近代の危機を乗り越えた山鉾巡行—日出新聞と『祇園会山鉾連合会記録』に見る
「お祭り騒ぎ」の意味付け〔マーク・テーウエン〕
金光教と遊廓・花街—都市布教と民衆〔高木博志〕
- 9月2日 建築史フィールドワーク（旧竹内栖鳳邸「霞中庵」～白峯神宮～護王神社旧富岡鉄斎邸）
〔清水重敦〕
- 10月6日 「白蓮事件」再考〔福家崇洋〕
- 11月17日 シンポジウム「博物館と文化財の危機—その商品化、観光化を考える」
文化財住宅を博物館にする〔小泉和子〕
対話する資料館〔岩城卓二〕
博物館の可能性〔久留島浩〕
文化財と政治〔高木博志〕
- 12月22日 京都舎密局の写真〔大塚活美〕
水木要太郎と近代美術—水木の『大福帳』所見から〔國賀由美子〕
- 2019年3月18日 「加賀百万石」の記憶と京都文化—近代金沢における都市イメージの形成
〔本康宏史〕 於、清風荘
- 4月6日 近代仙台と民俗の変遷〔佐藤雅也〕
広沢池・沢乃家・佐野藤右衛門邸花見
- 4月20日 人殺しの花 花の誘惑 戦死への誘惑 死へ誘う花—政治空間におけるコミュニケーションの不透明性〔大貫恵美子〕
- 5月13日 戦間期における京都の遊郭—経済的側面の考察〔瀧本哲哉〕
日本画家・六人部暉峰について〔里見徳太郎〕
- 6月9日 京都と夢—南蛮・野長瀬晩花・花街〔高木博志〕
太田喜二郎と藤井厚二〔植田彩芳子〕

- 於、京都文化博物館 懇親会・静（旧正宗ホール）
- 7月6日 名古屋城二之丸庭園の復元整備に向けて—絵図と発掘からの検証〔丸山宏〕
- 9月21日 彦根巡見—近代の彦根城と直弼顕彰（彦根城・玄宮園・埋木舎・滋賀県護国神社など）
〔市川秀之〕
- 10月26日 近代タイにおける「王都」と「古都」—ラタナコーシン（バンコク）王朝の行幸・
儀礼・考古学行政に着目して〔日向伸介〕
- 11月10日 シンポジウム「現場から考える天皇制」
近代天皇制と天皇就任儀式〔高木博志〕
「象徴天皇」とは何か？—天皇制の中に生きる私たちの自由と権利と責任〔池田
浩士〕
帝国の調整者としての女王—比較対象としてのイギリス〔井野瀬久美恵〕
「反日」「非国民」「不敬」をつなぐもの—民族的他者を析出する装置としての天
皇制〔駒込武〕
パンパンといわれたおんなたちと「天皇制」のおとこたち〔茶園敏美〕
天皇制と現代文明の行方〔福家崇洋〕
- 11月30日 天皇は何のためにあるのか—令和の皇位継承を考える〔ジョン・グリーン〕
天皇の代替りと渋沢栄一—明治神宮をめぐる「意図せざる結果」〔平山昇〕
- 12月21日 台湾への武徳殿の波及とその意味〔中川理〕
- 2020年1月25日 柳宗悦の京都時代 1924-1933—なぜ民芸運動は京都で始まったのか〔土
田真紀〕
- 9月12日 宇治川巡見（宇治川右岸・宇治発電所・亀石・天ヶ瀬ダム・宇治川左岸・天ヶ瀬橋・積み
出し浜など）〔小嶋正亮〕
- 10月31日 「舞妓モダン」展をめぐる研究会・展覧会観覧 於、京都文化博物館
「舞妓モダン」をめぐる鼎談〔植田彩芳子、加藤政洋、高木博志〕
- 11月7日 シンポジウム「大正期京都のロマン主義—吉井勇・花街・国展・映画」大正期京
都のロマン主義〔高木博志〕
『五足の靴』『夢の女』の発見—異国憧憬のまなざしと〈祇園〉〔細川光洋〕
大正期京都の都市空間—〈光と影〉三景〔加藤政洋〕
国画創作協会結成の位置と意義〔中野慎之〕
マキノ映画における京都の花街・舞妓表象—万博から「祇園小唄繪 日傘第一話
舞ひの袖」（1930）へ〔富田美香〕
- 2021年3月27日 久保田米倦と明治期京都画壇〔森光彦〕
吉川観方と京都文化〔松川綾子〕

特集「近代京都と文化」にあたって（高木）

- 4月 3日 富岡鉄斎と京都の大正壬戌赤壁会〔柏木知子〕
吉田山・黒谷掃苔（田能村直入・白幽子・三井家・会津藩墓地など）
- 5月 22日 谷崎潤一郎の平安幻想についての覚書〔藤原学〕
水上勉「雁の寺」における京都のイメージ〔イリナ・ホルカ〕（ZOOM開催）
- 6月 12日 時局匡救事業と道路—京都府の道はどのように変わってくるか〔高久嶺之介〕
文化財制度と近代ツーリズム—京都・奈良の「創られた伝統」はどのように浸透したのか〔菅沼明正〕（ZOOM開催）
- 7月 31日 岩倉具視とイギリス—仏典交流を通して〔齊藤紅葉〕
近代京都における副業奨励と農民美術〔青江智洋〕（ZOOM開催）
- 10月 23日 明治期の東山の変化と美術商の活動〔山本真紗子〕
市街地の拡大と日用品小売市場の出現〔中川理, 和田藩〕（ZOOM開催）
- 11月 14日 『太夫さんより女体は哀しく』（稲垣浩監督, 1957）上映 於, 京都文化博物館
戦後日本映画における島原—『太夫さんより女体は哀しく』（1957）と『廓育ち』（1964）を中心に〔木下千花〕
- 11月 23日 「東本願寺と京都画壇」展・観覧 於, 大谷大学博物館
東本願寺と京都画壇—近代への道程を中心に〔國賀由美子〕
- 12月 11日 尊攘堂における「活きた勤王」—近代京都文化を支えた人びと〔池田さなえ〕
寿岳文章と『紙漉村旅日記』—1930年代後半の全国手漉紙業調査〔玉城玲子〕
- 12月 27日 京都の除夜の鐘—ラジオとの関わりに着目して〔平山昇〕
戦時下の新村出〔福家崇洋〕（ZOOM開催）
- 2022年1月 22日 幕末京都の感染症対応—安政六年コレラ流行時の御千度をめぐって〔鈴木則子〕
京都の近代染織と周辺地域—近江商人系企業の役割を中心に〔北野裕子〕
（ZOOM開催）
- 3月 7日 梶原緋佐子の初期作品について—女性画家が描いた花街・遊廓の女性〔植田彩芳子〕
明治神宮外苑聖徳記念絵画館壁画事業と京都の日本画家・猪飼嘯谷をめぐって〔長志珠絵〕（ZOOM開催）